

2025年6月27日

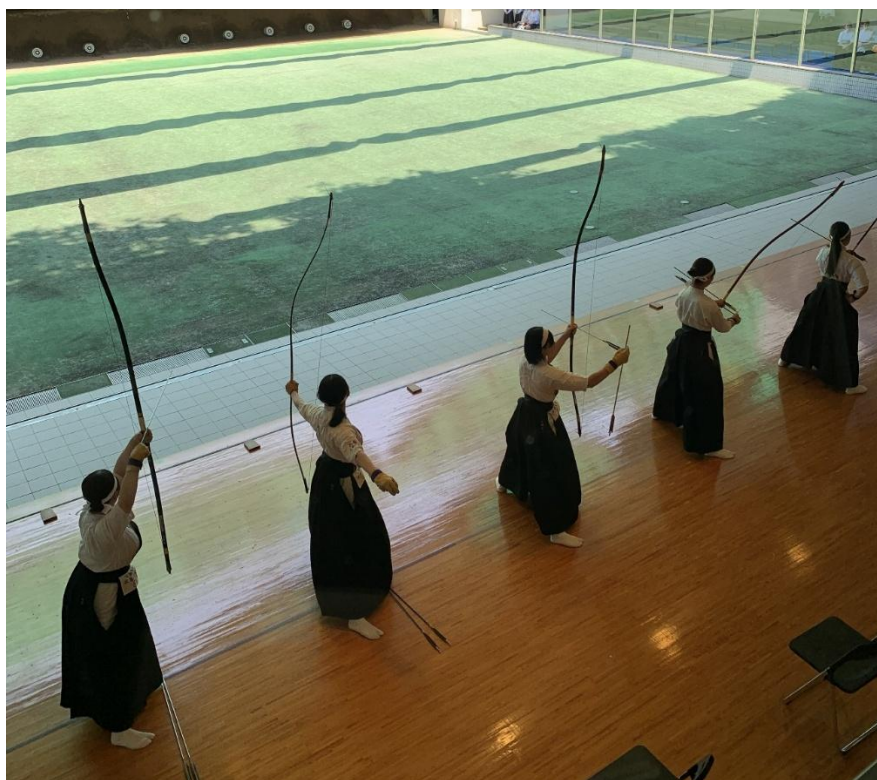
校長 岡 利道

部活動 点描 ～弓道部～

いよいよ、弓道部さんの登場です。現時点では、顧問2名（本校教員）、部員10名（3年3名・2年2名・1年5名）です。

部員の皆さんは、代々慣れ親しみ使ってきた本校弓道場を利用し、伝統を継承しようという気概をもって稽古に励んできました。なにせ広島県では、いや全国でも、本校の存在は確固たるものがあります。枚挙にいとまがないので、一例を挙げることとなりますが、団体の部で全国準優勝（平成27年度）・全国8位（平成29年度）といった成績を誇ります。個人の部も、「推して知るべし！」なのです。

ここでは、ホットなところで、「第78回 広島県高等学校総合体育大会 弓道競技の部」（令和7年5月31日(土)・6月1日(日)、広島県立総合体育館弓道場）での活躍ぶりをお伝えします。写真は、5月31日(土)における勇姿です。



主将の水田さんはじめ、丸山さん、藤田さんという3年生のメンバーとしての最終戦です。結果は、次のとおりでした。1立ち目（5月31日）は7中、2立ち目（6月1日）も7中、計14中。敗退となったものの、岡が見た限り、本校の選手5名は終始冷静に、気合をみなぎらせた戦いぶりでした。後ろからの観戦でしたが、選手の立ち居振る舞いは見事でありました。

顧問の一人である稲川教諭談です。「17中以上が団体入賞というレベルの高い試合の中、二日間にかけて安定した行射であったことは、生徒の粘り強さを伺えるものでした。今大会で3年生は引退となりますが、後輩に見せるべき姿を届けられたのではないかと思います。」



後日、稲川教諭と話す機会がありました。3年前にさかのぼります。当時、部員の練習参加率も低く、試合どころではないという状況。県大会は棄権せざるを得なかったという、無念の初年度だったのだそうです。現3年生たちが1年生のころです。

やがてその部員たちも、新人戦に臨むことができるようになりました。水田さんは、中国大会出場枠の12位以内を目指すまでに成長しました。しかし、その試合は楽なものではなかったのです。「射詰法（いづめほう）」という方式により、勝ち残りをかけた戦いです。その時、水田さんはプレッシャーをはねのけ、2連続命中で、入賞を果たしました。

稲川教諭いわく、「その時から部内の空気が変わりました」と。「やればできるんだ」「もっと頑張ろうよ」という、お互いの気持ちを通い合いました。「相手に勝つ前に自分に勝つ（克つ）のだ」と意思統一し、部のモットーである「自ら学び、自ら考える（探究心）」を体現していくのです。

稲川教諭自身も弓道指導者講習会に通い、研究と修養に励みました。その甲斐あってか、部員たちも一射・一射をおろそかにせず、「的（まと）は心の鏡だ」ということ、「残心（ざんしん）…矢を射放した後の反応にこたえる構え」を意識することなど、成長し続けました。まさに心を育て、人を育てる部活動です。一つのこと打ち込んだ、その経験こそが宝物です。弓道部の3年生の皆さん、本当にご苦労さんでした。後輩の皆さん、益々のご活躍を祈ります。

本校卒業生の活躍について

もうテレビや新聞でも報じられましたので、ご存じかと思います。本校の3年生にとっては5学年先輩にあたる庄野愛梨（しょうのあいり）さんのことです。

庄野さんは、先の6月19日(木)に天皇、皇后両陛下が戦後80年にあたり広島県を訪れた時に、被爆体験伝承者の中から選ばれて、懇談することができました。皇后さまから、「とても大切なことを伝えられていますね」と声をかけていただいたそうです。庄野さん本人だけでなく、私たちにとっても、たいへん喜ばしいことと言えましょう。

以下、読売新聞6月20日の広島・地域版の記事を基に、私なりの補足もして、庄野さんの思いや願いなどをたどってみたいと考えます。今22歳と、とても若い庄野さんが、なぜ伝承者となられたのでしょうか。



庄野さんが中学1年の時のこと、お婆さんの友だちの岡ヨシエさんという方にお会いしたそうです。被爆者であったことを知ったのですが、当時は深く話を聞くことはなかったとのこと。その時、「被爆者はいずれいなくなる。今度はあなたたちが伝えるんだよ」と言われたことは、ずっと耳に残り続けたようです。ほどなく岡ヨシエさんはお亡くなりになりました。「もっとお話を聞いておけばよかった！」という後悔の念が残りました。

中学校を卒業した庄野さんは、広島文教大学附属高等学校へと進学します。いい教師に恵まれ、とりわけ岡室薫（おかむろかおる）教諭（現在は本校の非常勤講師）のまさに薫陶を受けます。やがて、広島文教大学教育学部教育学科初等教育専攻へと進みます。小学校教諭を目指すことになったのです。

広島平和記念資料館が力を入れている被爆体験伝承者養成のことを知った庄野さん。居ても立っても居られないとはこのこと。すぐに養成講座の受講申し込みをします。ですが、教師を目指す学生である庄野さんは、教育実習などもありますので、生半可な気持ちでは臨めません。相当な覚悟の下、受講しようと思決意したに違いありません。それを後押ししたのは、そう、先にも述べました「後悔の念」だったのです。



概ね2年間かかる研修に精力的に取り組んだ庄野さんは、頑張り続け、無事修了することができました。大学4年生としてこの資格を取得したことに、拍手を送りたいと思います。やがて、資料館で活動する被爆者（被爆体験証言者）から被爆体験や平和への思いを受け継ぎ、それを語る活動をしていくことになりました。被爆者の高齢化が進み被爆体験をお話しされる方が少なくなってきた中、被爆体験を語り継ぐために、庄野さんはこれからも目を輝かせて活動していくことでしょう。庄野さん、どうか輝き続けてください！



ここで、庄野愛梨さんと岡 利道のご縁について触れさせていただきます。

私は4月より現職となっておりますが、もともとは1995年、広島文教女子大学文学部初等教育学科に国語科教育法担当の教員として奉職いたしました。2019年には共学となり、広島文教大学教育学部教育学科となりました。在任中、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭・中学校教諭・高等学校教諭の養成に携わりました。長年にわたりましたので、本校の卒業生がゼミ生として入ってくれることもあり、その中でいちばん新しい人が庄野さんです。以前から平和教育や平和教材の研究をしたいということを決めていたようです。卒業論文も、広島市出身・被爆2世の著者である朽木祥（くつきしょう）さんの作品「たずねびと」を中心に研究したものでした。

庄野さんは、大学選びはともかく、進学する目的として「自分は何になりたいのか、何

を学びたい・研究したいのか」がはっきりしていました。このことは、とても大切だと思います。目的意識さえ明確であるならば、どの大学に進もうが、たいした問題ではありません。かつて大学に勤務していた者としては、声を大きくして言いたいと思います。



とは言うものの、ゼミ選択時に、「岡先生のゼミに入りたくて、ここを受験しました」と言ってもらったのは、忘れることができません。そして、庄野さんが中学1年の時に出会われた岡ヨシエさんのことに戻るのですが、偶然とは言うものの、私の母親と全くの同姓同名です。先の新聞記事で、初めて知りました。実母の岡ヨシエは、今92歳。島根県出雲市でひとり暮らしをしています。人の縁とは、不思議で、面白いものですね。